Kogakuin University

〔翻訳〕フランチェスコ・サヴェリオ・ニッティ「南部とイタリアの経済発展」および「未来の工業都市ナポリ」

勝　田　由　美

Traduzione: "Il mezzogiorno e lo sviluppo economico italiano" e "L'avvenire industriale di Napoli" dalle opere di Francesco SAVERIO NITTI

KATSUTA Yumi

「南部とイタリアの経済発展」

イタリアの統一は，いくつかの地域，とくに半島南部の犠牲なしには成し遂げられなかった。この広大な地域は，イタリア王国成立の際には，負債は少なく多大な公共資産を有していたが，地理的には国境線から最も遠く隔たったところに位置していた。このように，ヨーロッパのどの国とも異なっているイタリアの形状が，当初は，南部から北部へのおびただしい富の流出を決定づけた。

南部のイタリアは，まさに歴史家がいう「王国」(reame) にほかならなかった。北部のイタリアは多くの国々に分かれ，その各々が独自の制度を有していた。これらの制度は注意深く保たれ，貧弱であったものは強化された。南部はその軍隊と，無数の人員を抱えた粗末な官僚機構を失った。そしてわずか数年のうちに，資産は増えないまま，税金は途方もなく上がっていった。

すべては悪意で行われたのではなく，むしろ必然的な結果であった。移動した国境線が，1859年と同じく，南部に10万人の兵がいることを許容しえただろうか。1860年以降の切実な財政難は，収入の増加を必要とした。寛大にすぎて効果に乏しいナポリの税制を，変革期にある国に適用できただろうか。ブルボン王家のものであった南部の官僚機構を，丸ごと廃止せずにすんだだろうか。統一を果たすために，戦闘は北部で遂行されなければならなかった。ロンバルディア，ピエモンテ，リグリア，ヴェネトに，道路や鉄道や要塞を整備せずにいられただろうか。防衛という至高の必要性の前に，議論の余地はない。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

〔統一前の〕諸邦は公的債務の額も異なり，資産にも格段の差があったが，夢が実現した喜びや熱狂のただなかで，それを計算するのも妙ではないか？　資金が北部に集められ，工業国への転換が可能となった。保護主義があとの仕事をし，イタリアの三分の二は，少なくとも10年間は消費市場として機能した。すでに工業化は果たされ，ロンバルディアやリグリアやピエモンテは，近いうちに，現在のその繁栄の主たる理由を省みずにすむようになるだろう。皮肉ではまったくないが―皮肉を言う場合ではないし，言うつもりもない―，こうしたすべてのことは，北部の責任ではない。一国の地域間にこれほどの格差が存在する不均衡な現状は，政治的・歴史的条件の所産である。

だが，イタリアの北部はすでにそのことを忘れてしまい，慢心という過ちさえ犯している。南部が提供した数十億もの金は思い出されることなく，払った犠牲も考慮されない。イタリアには優生人種と劣等人種がある，とまで言う思想家もいる。南部人は大方，劣等人種に属している。人々の未来を簡単に予言し，進歩の能力がある者とそうでない者を区別しうる科学，いやむしろ，科学もどきの考え方がある。この生半可な科学は，南部人はあらゆる進歩の障害であり，あらゆる反動は南部に起因すると言って面白がっている。もう真実が語られてもよいときだ。真実は北イタリアの傲慢さに水をさし，南イタリアには今よりも自信をもたせるだろう。南部が，意図も認識もなしにではあれ，何を与え，どれほど貢献したかがわかれば，統一はさらに栄光あるものとなろう。

ミラノの新聞には，ロンバルディアの１回の選挙は，政治的には南部のそれの10倍の価値があるという記事をよく見かける。イタリアが公共面で無秩序なのは，南部人に原因があるというわけだ。イタリア政治に南部人が介入するようになって，状況がますます悪化したと言われることもよくある。南イタリアは，政治に無関心な封建貴族，無知な民衆，腐敗した政治屋たちがいるヴァンデのように思われている。南部の鉄道は財政難の，南部の役人たちは行政的混乱の，南部の政治家たちは軍国主義の，元凶であるとも。こうしたことはイタリアの半分の地域で，声をひそめて，我々の欠点を話すときの慎み深い口調でささやかれている。だから，私たちは，すべての真実を述べ，明らかにしなければならない。

ミラノで，南部の「封建貴族」(baroni) の話を耳にしない者がいるだろうか。食料の高騰は南部の封建貴族に莫大な利益を支払うためだと，国家の混乱も南部の封建貴族に責任があると，そして，南イタリアには，農業における大土地所有制のみならず，政治的な大土地所有制も存在しているのだという。南部の封建貴族とは，否定的な表現以外の何者でもない。南部の封建貴族に関する最古のカタログは，ノルマン王国時代のものですでに散逸しているが，最新のカタログは，土地金融の返済遅滞者リストのなかにあっていつでも探し出すことができる。

真実は，たとえ冷酷でも何より選ぶべきものである。その真実とは，南イタリアが，1860年以来，その資産に比して，イタリアの他のどんな地域よりも多くを与えたということだ。払いきれないほどのものを支払ったということだ（高額の税の徴収は，数えきれない収奪の

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

悲しい前触れであった)。そして,国は,あらゆることに対して南部にはわずかしか支出せず,少なくとも地主たちがそうであるのと同程度には国がその統治に関心をもたない地域が存在した,ということだ。

真実は,本書のどのページにも書きつくされているように,南部が,南部には罪のないあらゆることを非難されているということだ。国家の重要な諸制度はことごとく,少なくとも軍隊がそうであるように,すでにもっとも裕福であった地域に集中されている。様々な理由(債務の統合,公有財産の売却,商事会社の優遇,不償還国債の発行)で,自らの経済的転換の中心ともなりえた南部の富は,またたく間に北部に移転した。重税と南部以外の地域への国家支出の集中により,有害な事業が継続された。今や南部が最下位にならないことは,税のほかには何ひとつない。

それでも1880年まで,南イタリアからは,著しい「不均衡」を堂々と指摘する声はひとつもあがらなかった。この不快な語は,ロンバルディアとピエモンテで,南部人の土地税納入が少ないとされてより多額の支払いが求められていたときに,発明されたものだった。南部人の納税額は少ないと言われるが,少し調べれば誰でも,彼らがより多くを支払っていることを知る。南部人は国家に多くを要求すると言われるが,逆に国の方が,南部全域に微々たる金しか出していないということを知る。そして,南部人は公行政を席巻しているとも言われるが,逆に彼らはごく少数である。

イタリア統一の時,南イタリアは,変革のすべての要素を備えていた。広大な国有地,潤沢な貨幣資産,安定した公的信用。欠けていたのは,あらゆる政治的訓練だった。なすべきことは,中産階級の教育と,政治社会の形成だった。しかし,少々の必要性と,少々の無自覚と,大部分は南部人自身の責任から,まったく反対の道を行くことになった。

全面的に統一された南イタリアは,トスカーナや他の北イタリア諸地域に比べ,知的な水準では相当に劣っていた。長年に及ぶ支配のために,かつても今も,公共的モラルと私的なモラルの対照は顕著である。私的なモラル,とくに家族にかかわるそれは,一般に,イタリアの他のどんな地域においてよりもたいへん立派なものである。だが,公共的モラルの点ではしばしば非常に劣悪であることを,誰が否定できようか? 絶対主義政府は,市民の政治への関与をほとんど禁止しており,政治とは,多くの場合,買収や抑圧を意味した。南部人が,政治的には混乱要因となってきたことは否定できない。その地域行政はうまくいかないのが常であり,南部の政治家たちは,その大半が,地域の派閥のことしか頭にない。これらの派閥には,通商上の取り決めも,公安要員の常駐も,ほとんど意味をもたない。南部人は,特別法,補助金,しばしば実態のない政治的被害者に対する援助の要請などにおいては一致団結するが,共同の大事業についてはことごとく対立する。各人が得たものは大いに価値があるが,共同で得たものにはほとんど意味がない。

南イタリアは,政治的には存在しない。保守主義でも,自由主義でも,急進主義でもなく,無政治的(apolitica)なのである。あまりにも痛めつけられ,多くを与えすぎ,苦しみぬい

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

たのだ。平衡，安定，安堵して生活できる可能性が，少しだけほしいのだろう。

1860年，またとくに1876年以降，南イタリアは，政府の多数派を構成すべき地方とみなされてきた。県知事には，選挙の実施以外の役目はない。ある閣僚経験者は，管轄地域の全市長を投獄するほどの力を有し，自らを選挙の支配者と公言した県知事がいたことを，議会で証言した。あらゆる派閥が無知と窮状につけいった。悪は絶たれるどころか激しくなった。南部全体が，いかがわしい党派政治の子分たちのなすがままとなった。

このように，政治，関税，財政，行政が，自身の利益とは正反対の方向に進むことを理解した南部は，疑い深くなった。土地税を半分払わずにすむなら，憲法も半分放棄するだろう。南部は，王統派のヴァンデか体制のとりでのように思われているが，体制に忠実でもなければ背信的なのでもなく，ただ無関心なのである。ブルボン王家は，彼らが無知で幸福であれと望んでいた民衆から大いに敬愛され，王位剥奪の前年には凱旋旅行まで行っていたが，その王国は一日にして失われた。政治をしない国々こそが，もっとも革命的なのだ。ひそかに育まれた憎悪や盲目的な支配は，想像しうるもっとも革命的なものである。この意味では，議会や選挙制度ほど保守的なものはない。

南部人は，政治的に多くの不正を行っている！　とはいえ，不正を誇張すべきではない。イタリア王国初代内閣から先のペッルー内閣までのあいだに，一回以上閣僚を経験した174名は，ピエモンテ出身者が47名，小さなリグリアから19名，ロンバルディアから19名，半島南部から41名，シチリアから19名である。半島南部は，リグリアに比例するなら119名の閣僚を出したであろう。県政府，県知事，財務局長，将軍，なども今なおその大部分は，北部の役人たちの手中にある。ねたみからこう言うのではない。もし歴代政府がより誠実で，南部を「動かそう」としなかったなら（要するに南部で中産階級を選挙のためにさらに堕落させなかったなら），多くのことが可能であっただろうし，ともかく責任は南部人のみにあるのではない，とだけ言っておきたい。

南部問題は，現在，最大の問題であり，イタリアの自由と未来は，この問題の解決にかかっている。

南の地主たちは，ミラノの労働者も容認しないような生活を強いられることもよくあるが，政治的にはヴァンデの封建領主として描かれる。興味深いことに，1799年，1820年，1848年，そして1859年には，統制を欠くものの，このヴァンデのイデオロギーは，イタリアの他のどの地域よりも先に蜂起を試みた。この，金持ちのように払いのよい，議会多数派の温床のように扱われるこの地方では，国家は，徴税人や憲兵の姿を通してしか姿を見せない。

たしかに，南のブルジョアジーは往々にして気概がない。だが，イニシアティヴに欠けるのは，考えられている以上に困難さの結果である。人は，基本的な必要が満たされれば挑戦も可能となるが，その保証がなければあえて挑もうとはしない。ミラノでは，産業振興に必要な数百万の資金が確実に数日で集まるが，ナポリではそうはいかない。資産がすでに形成され，最初の育成が政策的に成されているからこそ，創出されたその状況が，資本家への報

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

酬をより容易に保証するのである。投資先を求めている資本があるときの方が，資本の不足する需要が存在するときよりも，人は相当に大胆になりうる。

1860年以降，南イタリアが大いに発展したであろうことは否定できない。農村は文明に開かれ，一般の意識も高くなった。人々は以前より自由になり，生活の向上が可能だと感じるようになった。教皇庁の昔の地図では，アフリカの内陸部が空白で「獅子の住む所」(*Hic sunt leones*) との不可解な語が記されていたように，文明の地図には南部のうちに広大な空白部があり，それは小さくなっている。

積年の願いであり目標であったイタリアの統一は，多くの誤りを伴ったが，そのもたらした利益も莫大であったから，非難ばかりはできない。だが，その利益がきわめて不平等であったために，現在のような対立が起きている。そして，ある地域の繁栄の理由が，関税や財政や政治にではなく，ありもしない民族的優越性に見出されかねない事態になった。そればかりか，最も多くを与えた者が，収奪者のように見られはじめた。

私は，南部でも最も貧しい土地であるバジリカータに生まれ，昔のことではあるが，その記憶は今でも鮮明である。この地域の人々は，県知事や閣僚になった者もいることで，「抜け目がない」人々だと思われ，国からも多くのものを得ただろう，と言われる。だが私は，この寂しく，厳粛な，貧しい土地を通るたびに自問した。「これのどこが『抜け目ない』のか？」と。賞賛であるとともに侮辱でもあるこの言葉，あこがれと不信を交えて語られるこの言葉に，何の意味があろう。ロンバルディアでは南部人は税を払わないと言うのを聞いたが，私の眼と心には，税を納入できずに土地を追われた数百もの家族の姿がやきついている。南部人は働かないと言うのも聞いたが，農村の貧しい人々が世界のどこにも例のないほど根をつめて働くのを目にした。貯金を隠しているブルジョアジーがいるとも聞いたが，私は，金融機関や数少ない金持ちに徴収停止を要請する，債務支払いの滞った人々しか見たことがない。ブルジョアジーの子弟たちが公行政を侵害したと言う者までいたが，軍隊においてさえ，南部諸地域は軍国主義を嫌悪する者たちを提供している。では，この不公正な作り話を支えているのは何であろう。こうしたことはなくしてはならないのだろうか？　真実こそ信じるべき新しい世代までが，なぜ虚言を述べる必要があるだろう？

そしてまた，まだ述べていない問題がある。イタリアには他に問題はないというほどの，もうひとつの問題が。これがあってはならないはずがあろうか？　人生の目的は安らぎではなく，民衆の活力が試されるのは，苦難においてのみである。そのすべてをひとことで言えば，問題とはモラルにかかわるもの以外にない。かのシェークスピアの悲劇の女性は言った。「してしまったことには取り返しがつかない」(What is done cannot be undone) と。してしまったことはもう済んだこととして，触れずにおこう。南イタリアは，善なる偉業と自身の未来のために，その与えたところのものを与えた。発展の遅れていた（このことも公平に認める必要がある）この地域は，文明への参入に代価を支払ったのだ。その参入権は少々敷居が高いが，その労にみあうものである。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

今，南イタリアは，性急な公共事業や，大げさな認可事業や，おそらくは新しい制度すら要請すべきではない。これらのものは，時に産業発展よりも投機に，地域経済の再生よりも事務員の創出に，役立つからだ。過去は大いなる教訓となるべきだ。より恵まれた者，より裕福で幸運な者は，より声高に主張する。中産階級に有効な制度や改革について述べることとしよう。

ロンバルディアやピエモンテの，文明国の賃金をすでに得ているような労働者たちに制度を新設する前に，そうした賃金は南部なしにはありえないことを思い出す必要がある。そしてまた，南部には今なおマラリアで不毛となった広大な平原があることを，思い出す必要がある。税を１リラでも増やしかねないようなことをする前に，アイルランドの極悪非道な領主以上に国家が残酷にみえる地域があることを，想起する必要がある。暴力もときには正当である。あらゆる創造は，暴力から生まれるからだ。国という意識ができあがった以上，暴力をもってであれ，南イタリアが閣僚の衛兵を提供しているという考えに基づくあらゆる制度に対抗しなければならない。南イタリアは資産もなく，実業的な教育（educazione industriale）もなされていない。国家がそのために何らかの支出をしても，寄生状態の撲滅どころか保持のために使われてしまう。だが，実業的な教育こそ形成されるべきなのだ。

1820年，1848年，そして1860年の革命の時でさえ，南部には国に職を請う無数の人々がいた。今でも「品位ある閑暇」（*otium cum dignitate*）の職は幸福と考えられ，息子が役人になれば母親は安堵の息をつく。1820年，および1848年に関する二つの研究で，私は，ナポリで膨大な数の人々が職を求めて役所に殺到したことに触れた。1860年にも同じことが起こり，ガリバルディは，その英雄らしい素朴さでイタリアは裕福だと信じ込み，ともに戦った南部の義勇軍で，兵士６人に対し１人の割合で士官に認められることを望んだ。南イタリアに少数の役人しかいないのは，あまりに多くを求めたからであろう。教育こそが変わらなければならない。南イタリアが，大いなる目覚めに向かっているとすれば，それは行政の不正を改め，経済を教育し，時間をかけてしか達成することはできない。

ときには，多少は気の利いた改革を寄せ集めた計画が提示されるが，一方では幻想が誤りを助長する。今後は，いかなる改革案，いかなる予算上の余裕においても，自然に恵まれず，統一にそのすべてを与えた南イタリアに配慮するべきである。現代人は分散を好まないので，意地の悪い憶測をしても，イタリアの分裂など想像もできない。万人の最大の幸福のためにも統一は必要であり，何より優先されなければならない。ドイツ，フランス，イギリス，そしてヨーロッパの開化されたどれだけの国民が，暴力も辞さずに，その統一の結びつきを強めようとしてきただろう。政治的・経済的統一は，だから論じるまでもないことで，ある地域にとって分裂が有利に見えたとしても，現代人の競争が，最後にはそれを忌むべきものとするだろう。

ここでの議論には危険もありうる。南部は，資産に乏しく，障害は数多く，小ブルジョアジーは貧しく，職欲しさに寄生主義を破壊するどころか助長しようとする無数の人々がいる。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

しかし，それにとらわれるべきではない。税負担にあえぐ南イタリアは，一息ついて，その視野を広げ，集団的意識を形成し，残存した反社会的なところのすべてを取り除く必要がある。予算に新たな支出の余裕がないなら，より裕福で悩みのない者に何も与えないために，何も要求すべきではない。だがもし，財政改革の必要があるなら，他のどこよりも先に，税がひょうや伝染病の10倍もの害をもたらしている諸地域のことを考えなければならない。新しい制度が作られるべきであり，それを国境におく必要がないなら，南部という行政上の荒野こそが思い出されるべきである。

何よりも，イタリア人の政治意識を変える必要がある。いつになったら，職務がより困難な南部に，最悪ではなく最良の役人たちが派遣されるのだろう。いつになったら，現在のような寄生主義が助長されずに攻撃の的となり，南部が有力者や詐欺師議員の勢力争いの場とみなされなくなるのだろう。いつになったら，資産の形成が促進され，新設の税が南部を苦しめることがなくなるのだろう。南部の工業化が援助される時こそ，問題は解決するだろう。

イタリアという地名が半島の最南部に由来するものなら，その歴史の大部分もそこから始まったのだ。自由という問題と統一の未来は，南部問題の解決のうちにある。

〔未来の工業都市ナポリ〕

ナポリが産業に恵まれず，商取引にも時間がかかるとすれば，住民の資力が相当に乏しいことは，容易に理解できる。外見を派手に見せる習慣が多少あるために，多くの人が，ナポリはなお非常に豊かであると思い違いをしている。ナポリは他の都市と同じ程度には豊かであり，むしろ他にまさっていると信じこんでいる者も少なくない。ところが，ナポリには，憂慮すべき兆候，他所にはない不穏な兆候がある。というのもこの30年来，人口が増加を続ける一方で，食物消費量が常に前年比で減少している大都市は，ただナポリだけなのだ。この新たな事態は，全人民の未来を脅かす最大の危機であるから，その悲惨な実態を述べておこう。消費は，生産の目的であるだけでなく，一国の状況のもっとも確実な指標でもある。文明は，需要を不断に増加させ，消費を絶え間なく発達させる。工業化のもっとも進んだ国々は，消費も最大で，最高の活動と最高の生活水準をかね備えている。暮らし向きを落とさず，よりよい生活をしようとする強固な意志は，ある意味で，向上する人民の特徴である。今やナポリは，ヨーロッパで消費が最少の都市であるばかりか（増加が見られるなら，それも悪くはないだろうが），すでに過少な消費が急激に減少し続けている，唯一の都市なのである。

まさにこのために，住民は肉体的にも抵抗力がなく，あらゆる過酷な病気が頻繁に流行し，地域の生活は貧しい。この点で，ナポリに比べるものはない。

保護関税の引き上げ後にナポリの消費税収入は減ったという研究もあり，その減少の程度と意味が議論となった。その後数回にわたる関税の見直しがあり，今や消費税収入は確実な指標ではなくなった。保護関税の引き上げによって税収が増えるとすれば，それに伴う消費

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

の減少もありうるだろう。ナポリの町に運び込まれた消費物資の量を知る必要がある。ご存知のとおり，国は現在，ローマやナポリのコムーネで消費税を徴収しているから，脱税は以前よりも減少したと考えよう。

ある種の消費の減少を密貿易で説明しうるとの説を唱えた者もいた（冗談であろうか）。だが，密貿易の影響は常にそれほど大きくはなく，さらに以前よりも減少している。武器をもつ税関吏が税を徴収するようになれば，脱税は必然的に減るはずだ。数学者のいう「他の条件が一定」（*coeteris paribus*）の場合，脱税が年々減少することは疑いない。だから，消費の全面的減少という事実はきわめて重大なのだ。ナポリの人口は，1872年には448.335人であり，1898年には540.373人に増えた。しかし，1872年から1899年にかけて，消費には一貫した減少が見られる。都市改造（risanamento）事業にナポリの労働者数千人が雇用され，関連支出によって消費が一時活性化した建築ブームの数年間を除けば，消費はほぼ連続的に減少している。

実際，1872から1899年の間に，ナポリの消費は著しく減少した。ワインの消費量も減り（貧困がアルコール中毒のあらゆる危険を打ち負かしたのだ），日常用ワインの消費量は481.212ヘクトリットルから414.075ヘクトリットルとなった。以前からあまり食べられていなかった肉類は，今ではほとんど口にされず，その消費量は，急減といえるほどの減少を示している。ナポリの人々はトルストイを知らないが，その信条は実践し，日ごとに菜食主義者となってワインのような有害な嗜好品は控えているのだ。菜食主義は，予想以上に広がっている。ナポリに運ばれる食肉は，兵士によって，病院で，そしてホテルの多数の宿泊客によって，大部分が消費される。さらに痛ましい事実は，パンの消費量の減少である。ナポリのコムーネに運ばれる小麦や小麦粉の総量は，755.560キンタルから745.286キンタルに減った。ナポリの人々は，パンの小食が習慣になりつつある。魂を試練に導くには有益だろう！　人々は，パンの代わりに雑穀を食べており，トウモロコシの消費量は，17.936キンタルから50.285キンタルに増えた。生理学上は，一日一人あたり40～60グラムの砂糖で労苦に耐え，活力が得られるが，ナポリの消費量は平均して数グラムで，1872年には36.370キンタルあったものが，1899年にはわずか29.616キンタルとなった。魚の干物（庶民の食生活でタンパク質の欠乏を補う有用な食品だった）も，60.465キンタルから11.191キンタルへと急減した。豆類の消費量はめざましく増えているが（何かを食べなければならないから），ぜいたくどころか，惨めでない程度の生活に相当する物資の消費はことごとく，激減した。たとえば，現在のナポリは，1872年に比べて10万人も人口が増えたのに，チーズの消費量は減っている。伝統的なマカロニ料理はますます珍しい，味気ないものになった。貧困が，味まで変えてしまったのだ。

ナポリの人口は，1872年を100とすると，1899年には120にも達するが，最低限の生活必需品の消費は，100から94.82へと減った。ナポリは，もはや植民地の首都さながらと化し，その消費は日々減少している。住民は，しばしば，インド人に比べてもそれほど良い物を食べ

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

ているとは言えない。一方で，ジェノヴァやトリノやミラノでは，食生活は急速に改善されている。小都市でもナポリより肉の消費量は多い。30年以上もの間，ミラノやトリノの消費はナポリとそれほど差がなかったが，今では，イギリスの都市に対する植民地の都市ほどの違いがある。

ナポリの町に引き起こされた事態は，それゆえまったく異常なのである。政治的無秩序はいかなるものであれ，根本的無秩序や経済不況の進展に比べれば，とるに足りないことである。経済不況の方がある意味では重大である。ともあれ，通常のやり方では，現状は悪化するだけであろう。提起される解決策は大半が実現性も効果もなく，有害で，前述した害悪は，日ごとに深刻化している。地代生活者（rentiers），法律家，医師を主とするブルジョアジーの構成自体が，あらゆる経済変革の試みを妨げ，悪への憤りさえ失わせている。すべてが悲劇としか言いようのない状況を前に，なおナポリが裕福であるなどと言う者がいる。心配するようなことが本当にあるのか，とも言われる。悪に対する無自覚は，このように悪そのものよりも有害なのだ。欲すれば可能となる，というわけでもないであろうが，認識なしには何ひとつ欲することもないのだから。通常の方法での変革には，その要因がすべて欠けているばかりか，その可能性すら皆無である。

だから，ナポリの問題を考えれば考えるほど，その悪の根深さを知れば知るほど，軽率に，嘆かわしいほど執拗にくり返される，ありきたりの解決策にはいや気がさしてくる。無益な幻想と不毛な主張のもとに，ナポリの変容という問題は，国民的必要としてつねに大きくたちあらわれる。かつての大消費都市ではなくなったナポリは，大工業都市とならなければならない。大都市は，日々衰退する。外見の華やかさも増大し続ける貧困を包み隠すには足りず，寄生的生活者はことごとく，貧困が増大すれば利益を得るからだ。変化を押しとどめようとする勢力は大きく，有益な方向に行動する者はわずかである。

すでに見たように，ナポリのブルジョアジーは，大部分が法律家と医師，すなわち，社会的事件や訴訟，そして病を糧に生きる者たちである。ごく少数の例外を除き，活動的な産業家はいない。住民は有能で賢く，従順で労働規律に順応しやすいが，今でも偏見にとらわれ，栄養不良で肉体的には弱く，技術的訓練を受けていない。彼らは，寄生主義的で，見世物好きで，貧しさをどこまでも甘受する，進歩とはおよそ無縁の悪しき伝統のなかにいる。その反面，仕事には簡単に適応するし，習得も迅速である。規律的精神はもたないが，断固たる統制をしくならば，それも容易に身につけてしまう。ナポリでは，職業によって，他国ではありえない，日に14，15，16時間もの労働をする。これは，伝統が称揚してきたものを制度にまで高めた，もっとも恐るべき人間の搾取である。

それでは，何が革新的勢力となりうるだろう？　ブルジョアジーは人民の圧力によってのみ向上しうるが，当の人民はあまりに貧しく，あまりに無関心で，自らの状態を認識できずにいる。彼らは突然暴力を行使し，根強い抵抗を見せる。そこで，ナポリの町では，功績のためでも不正によってでもなく，ただ人々の無関心のゆえに，他所では容認されないような

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

人間や徒党が支配する。コムーネの行政は，長年にわたり混乱し，経費は高く，党派的利益に支配され，行動的勢力となることは難しい。コムーネの財政状態は最悪で，支出の余裕はまったくない。ナポリのコムーネが，過去40年間に毎年200万リラの借金をし，1901年末にはその債務の累計がおよそ1400万リラに上る一方，単年度赤字も200万リラ近くに達したことを述べれば十分だろう。直接・間接を問わずあらゆる税負担が重く，消費の減少が続くために税の新設もできず，悲惨極まりない財政状況にあるコムーネに，財政的支援は期待できない。

ナポリのコムーネの負債はすでに膨大で，欧米諸国の豊かな都市の多くに比べてもはるかに高額である。ナポリのコムーネには，住民の数を考慮すれば，ロンドンとほぼ同額，エジンバラ，ライプツィヒ，ミラノの約２倍，トリノのおよそ３倍の負債があり，それはアメリカやヨーロッパの最高に裕福な首都のいくつかを大幅にしのいでいる。

これまでの記述から，次の結論が導かれる。

1)　前述した多くの理由により，ナポリの町には特別な問題が存在する。モラルの問題は，大部分が経済的状況の結果である。1860年以来の統一体制は，南部経済を相対的に低下させたが，ナポリの都市経済にはとりわけその影響が大きかった。

2)　ナポリの経済状況は，きわめて特異である。

a）人口の増加に反して消費が減少しているヨーロッパ唯一の大都市である

b）日ごとに貧困が増大し，収支不均衡が拡大している

c）銀行預金や各種の預金，公的収入の配分，商業取引額が劣悪な状況を呈している

d）工業では，ナポリは小都市コモほどの重要性もなく，海運では，小都市サヴォナを少し上回る程度である。ナポリが自由にできる資産はごくわずかで，日々減少している。

3)　ナポリは消費都市であることをやめ，新たな活力を得るために工業都市となるべきだ。ナポリが工業都市となるには，変革に必要なあらゆる社会的条件が欠けている。

a）資本の不足

b）産業ブルジョアジーの欠如

c）人民に対するしかるべき技術教育

4)　逆に，以下に見るように，物質的な条件はすべて備えている。

a）地中海商業の現状からみて有利このうえない港湾状況

b）イタリアでも特に有利な，容易に利用できる近傍の多大な水力

c）工業にとって有能な熟練労働力となりうる多くの住民の存在

5)　工業都市としての再生の試みは，現状認識にたち，発展のための社会的条件の欠如を自然条件の有利さで補いうるようになされる必要がある。ナポリの自然条件は発展に適しており，投資先を求めている新規の資本のみならず，技術的に確立された産業資本の招致も可能である。

産業は，発展の理由や根拠がなければ発生も進歩もしないことは明白だが，それらを人為

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

的に決定することは相当に困難である。まさにそれゆえ，条件に恵まれた所では，工業都市は自ずと形成される。この点を認識し，その重要性を認めながら，ナポリを大工業都市にする方法を示そうとすることは，妙に思えるかもしれない。だが，よく注意していただければ，ここで提案する方法には何ら人為性はなく，少しの幻想も混じっていない。これらは，何らかの産業をことさらに興そうとする考えに発するものではないが，産業発展の妨げとなる大部分は人為的な障害を，除去する必要はある。

たとえば，ナポリとその周辺コムーネの合併は，ナポリの人口が70万８千人ではなく56万6千人であることに何の根拠もないのだから，自由経済主義の急先鋒でも反対はできない単純な行政措置である。臨海工業地域の策定は，一種の建造物規制であり，都市で家屋の高さを制限するのと同様の措置である。免税地帯を創設して当該区域を関税の影響から守り，製造・販売上，最大限の自由を与えることもできる。諸施策のなかで唯一社会主義的で，自由主義思想との抵触が考えられるのは，莫大な水力の共同収用と，その発電エネルギーの原価販売である。これは一見，イギリスで国が炭鉱に対して行ったことのように思われる。しかし，分割しても大きな不利益はなく，有害な独占を生じやすい水力の性質を考えれば，水力エネルギーには共同収用が最適だろう。ナポリの経験は，こうした点で，国にとっても重要なものとなりうる。

いずれにしても，この論稿では，恣意的な計画を支持するのではなく，発展のためにいかなる自然条件が存在し，どうすればそれを効果的に調整しうるかを示している。人工的な部分はなく，自由主義の最正統派にも支持されるだろう。ここでの記述はすべて事実の描写にほかならない。特定の産業に対する補助金は承認されずに反対され，既存の寄生主義的方法も，もはや人々に支持されず，厳しい公的批判を受けている。

だから，ここで述べたことが真実ならば（直接に，かつ公平に実施された調査の結果を否定しようとする者はいないだろう），誰もが結論の必然性から逃れることはできないだろう。ナポリの変革にとって革新的な最大の要因は，安価に動力を生産しうる膨大な水力資源の利用である。産業における動力の重要性は，私がたびたび研究したことである。ヨーロッパで大規模な炭鉱があるところはどこも，近くに大工業都市が発達している。イギリスの「ブラックカントリー」が人であふれかえっているのに対して，農業地帯（南西部）では，人口も停滞している。この100年来，地球上の古代植物の残滓が地中から掘り出されて機械の養分となるのにあいまって，大工業都市が生まれ，それ以前の歴史には類例のない広大な都市，各人が近距離にある巨大な集団が，形成された。先ごろイギリスの下院でマイケル・ヒックス＝ビーチ卿が宣言したように，石炭が，イギリスを現在の姿にしたのだ。イギリスの大工業をつくりあげたものは，石炭なのだ。同様に，莫大な水力資源を水力エネルギー生産に利用すれば，遠からぬうちに新たな人口の変化が生じるにちがいない。ヨーロッパではとりわけスウェーデン，ノルウエー，スイス，アルプス周辺，そしてイタリアで。

ところで，ナポリはこの点で際立って有利な状況にある。イタリアの大都市で唯一，近く

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

に5，6万馬力のエネルギー源があるからだ。ミラノでは150km以上も離れた遠いアルプスに水力を求めなければならないが，海に面して通商に開かれ，交通も容易なナポリは，ミラノでもジェノヴァでもフィレンツェでもヴェネチアでも入手できないほどの水力を大がかりな設置作業なしですぐに生産しうる，多大な自然落差を利用できる。そして，現在，最大の欠陥は産業ブルジョアジーおよび教養と技術教育の欠如にあるが，これも，他国の産業や技術を招致しうる利便性で簡単に埋めあわせることができるだろう。これらの導入なしに，変革は不可能である。

さて，もし国が経費を投じてこの大いなる事業を引き受けるとしたら（これこそが，平素の政治の仕事（lavoro di politica）ならぬ，真の健全な「労働政策」（politica del lavoro）である），水力エネルギーを原価で供給しても，投下資本に少しも損失は出ず，財政が潤うことで間接的に回収しうるだろう。水力発電に関する著作で述べたように，ナポリの経験は国にとっても重要であろう。実際，良い結果が出るなら（出ないことはありえない），水力エネルギーで火力のそれを徐々に代替するという国の計画は，大いに進展するだろう。イタリアは決定的な時期にあり，無定見に進まずに明確な産業計画を立てるなら，急速な発展も可能である。イタリアは，動力をもっぱら石炭に頼り，工業が鉄鋼業を主に成り立っていた限りでは，常に不利であった。だが今や，すべては変わりつつあり，水力エネルギーは我々のような国には新たな復興要因となりうるだろう。ところが，公共河川の現在の体制は，想像できないほど合理性，確実性に欠け，気まぐれな払い下げが巨額の浪費をもたらしている。目的もなく進んでいるが，石炭価格が今後も上昇すると考えれば，明確な目標をたてて迅速に行動する必要がある。

ナポリには，大規模製鋼業の新たな拠点となるのにとくに有利な条件がある。工業生産向けの製鋼業は，現在のイタリアではとりわけ海に近いリグリアで営まれているが，同様に，ナポリでは臨海の製鋼所が，それも，近代技術のあらゆる長所を備えて建設されるだろう。ナポリは，多大な水力エネルギーを有し，海運に恵まれ，労働力も豊富である。大製鋼所は，当初は軍需生産を目的とするしかないが，やがて民需中心に転換しうるだろう。クルップ社やル・クルーゾ社がたどった道と同じように。政府はテルニに一大製鋼所を建設し，製品の販売を保証した。ナポリにそれだけのことをしないのは，実に不公平ではないだろうか。ナポリには，テルニと同じ株主もいれば，小口の株主もいるだろうが，重要なことは，新たな施設が建てられるべきなら（ほぼ必須のことである），より条件の適した，必要性の大きな場所にそれを作ることである。

これらの計画は多くの利益を侵害する。が，テルニの大株主が常に20％の利益を手にしていることこそ正当であろうか？　その半分の利益では，その半分を手中にするのでは低すぎるだろうか？　テルニの株はロンバルディアに，とくにヴェネトとリグリアにある。「静かなものは動かすな」（*quieta non movere*）というわけだ！　持てる者は，彼らの利益を脅かすあらゆる提言を悪とする。しかしなぜ，彼ら自身は新しい事業に手を貸さないのだろうか。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

いずれにしても，国は，テルニの企業には現行の契約から生じる以上の責任を持たない。新たな政府委員会が始動しうるだろう。ナポリの新しい施設は，テルニよりも格段に有利な，発展に適した自然条件のもとで，当初は軍需に，後には民需を目的に操業しうるという確信をともなって。

これはほんの一例にすぎない。他にもどれだけ例があるだろう！　鉄道資材の供給は，ほとんど，いやむしろ独占的に北部で行われ，鉄道会社の側も業務の大半を北部で遂行している。鉄道協定（convenzioni ferroviarie）はもうすぐ期限を迎えるが，なぜこの仕事を別の仕方で割り当てることができないのだろうか？　ナポリに大工場を建て，強力な工業中心地とすることもできる。客車，機関車等，鉄道資材一般の製造は，なかでも大きく発展しうるだろう。

だが，自由な産業，公明正大な産業，競争によって活力を得た産業こそが，ナポリに生まれなければならない。それは，形成が可能な状況になり，その最初の不安定な歩みが妨げられなければ，豊かに育つだろう。

あらゆる創造の事業は何らかの痛みを伴う。新しい存在はことごとく，それが生じるや否や，古い強力な機構と闘争せざるをえない。イタリア南部は，北部が1872年から1887年のあいだ諸外国に対抗した以上に困難な状況下で，イタリア北部に対抗している。違いはそれだけではない。1887年に，北部は自身の資産を保ったまま，南部のそれをほとんど自らのものとした。しかし南部は，より深刻な事態から再起しなければならないのだ。だが，再起するだろう。なぜなら，遅かれ早かれ，その再生は，国民にとっても大きな利益であることが理解され，きっと支持されるであろうから。

〔解　説〕

フランチェスコ・サヴェリオ・ニッティ（Francesco SAVERIO NITTI）は，1868年，イタリア南部バジリカータ州メルフィに生まれた。祖父一家は医師であったが，父は学業途中でイタリア統一運動に身を投じてガリバルディの千人隊にも加わり，イタリア王国成立後には，教員や地方公務員を務めた。フランチェスコは，高校入学の時に一家でナポリに転居し，ナポリ大学法学部に進学した。すでに学生時代にその研究と文筆の才をジュスティーノ・フォルトゥナートに見出され，『コッリエーレ・ディ・ナポリ』をはじめとする自由主義的な雑誌・新聞に論説を掲載している。1890年に大学を卒業し，1892年にはナポリ大学の政治経済学教授となる。

1894年には，イギリスの『エコノミック・ジャーナル』をモデルに幅広い論客による中立的な立場の国際的学術雑誌をめざし，『リフォルマ・ソチアーレ（社会改良）』（*Riforma Sociale*）誌を創刊した。国家財政や南部問題に関する研究活動にも精力的で，『北と南』（*Nord e Sud,* 1900），『ナポリ』（*La città di Napoli,* 1901），『ナポリと南部問題』（*Napoli e la*

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

questione meridionale, 1902)，『財政学原理』(*Principi di scienza delle finanze,* 1903)，『イタリアの富』(*La ricchezza dell'Italia,* 1904) など，統計資料や調査を駆使した数々の著作を発表した。ここに訳出したのは，「南部とイタリアの経済発展」が『北と南』から，「未来の工業都市ナポリ」が『ナポリと南部問題』から抜粋したものである。テキストには R. Villari, *Il Sud nella storia d'Italia,* Bari, Laterza, 1988[2], pp.273-293 を参照した。

ここでの訳にも見られるように，ニッティは，南部の中心的都市であるナポリの発展の道を，当時しばしば主張されていた観光や在来の小規模産業ではなく，国家の保護を受けた大工業に求めていた。彼の主張は，ナポリの振興策を審議する王立委員会の最終報告に取り入れられ，ジョリッティ政権下で制定された「ナポリに関する特別法」(1904年) に反映された。この結果，ナポリ郊外のバニョーリにはイルヴァ製鋼（現イタルシデル）の工場が誘致され，南部初の近代的大工場が設立されたが，保護関税や税制の見直し，大土地所有制の改革といった南部社会の構造的な変革がなされなかった点で，ニッティの主張は，ジョリッティ時代の南部政策とともに，その限界を指摘されている。

1904年末，ニッティは，地元の選挙区から圧倒的な支持を得て，急進党から下院議員に当選する。1911～14年にはジョリッティ内閣の農商工務相を務め，1912年には，イタリア初の公共企業体 (ente pubblico nazionale) でもあるINA (Istituto Nazionale delle Assicurazioni,「全国保険機構」) を設立し，民間生保会社の年金保険をここに集約して公的年金制度を創設した。

第一次大戦参戦には消極的であったが，大戦末期の1917年にはオルランド内閣の国庫相となり，1919年には，講和体制下での領土拡張政策失敗による同内閣の倒壊により，首相に就任する。ニッティは，南部に横行する不正選挙の改革を意図して比例代表制を導入するが，同年秋の総選挙では，社会党とカトリック政党人民党が躍進し，彼自身の属する自由主義諸派の議席が減るという皮肉な結果となった。さらにニッティは，戦後不況を背景に，議会外でも左右両極の運動激化という難局に直面する。脱走兵への恩赦や，南部農民の未耕作地占拠を事実上追認するヴィゾッキ令などの民主主義的政策が保守派やナショナリストから非難をうける一方で，ダンヌンツィオによるフィウーメ占領に対して明確な対応をうち出せないことで国民の信頼を失い，1920年には辞任を余儀なくされる。

ファシズム政権成立後は，政治活動を退いて故郷に近いポテンツァ近郊アクアフレッダの別荘にこもり，『平和なきヨーロッパ』(*Europa senza pace*)（村田勤訳『平和なき欧羅巴』大日本文明協会，1923年）をはじめとする「ヨーロッパ三部作」を執筆した。ヨーロッパ文明への信頼を失わず，英米のイニシアティヴによる平和的国際秩序の回復を希求するニッティの姿勢は，国外では英語圏を中心に高く評価され，1922年度のノーベル平和賞候補ともなった。しかし，こうしたことがムッソリーニからは警戒され，1923年末，別荘から久しぶりにローマの自宅に戻った際にファシストの襲撃を受けた。この事件によりニッティは家族とともに亡命を決意し，チューリッヒを経てパリに赴く。パリには，1925年からおよそ20年間滞在し，反ファシズムの言論活動を続けた。イタリア解放後に帰国したニッティは，1946

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

年の制憲議会選挙に際して，クローチェ，オルランド，ボノーミらと「国民民主連合」（Unione Democratica Nazionale）を結成し，当選した。彼の非宗教的な自由主義的民主主義は戦後のイタリアで広範な支持を得ることはなかったが，共和国憲法制定後は上院議員となり，教育振興などに努力した。1953年，ローマで没する。

〔参考文献〕

A. Anello- M.T. Cerbino, Vita e opere di Francesco Saverio Nitti: una sintesi, in: P. Bottini e V. Verrastro (a cura di), *Villa Nitti a Maratea: il luogo del pensiero,* Potenza, Ministero per i Beni e le Attività Culturali, Consiglio Regionale della Basilicata, 2006.（Web上で閲覧）

F. Barbagallo, *Francesco S. Nitti,* Torino, UTET, 1984.

G. Candeloro, *Storia dell'Italia moderna vol. VII, La crisi di fine secolo e l'età giolittiana,* Milano, Feltrinelli, 1986.

A. Capone, Età liberale, in: AA.VV., *Storia del Mezzogiorno, Vol.XII,* (*Il Mezzogiorno nell'Unità d'Italia*), Napoli, Edizioni del Sole, 1991.

S. D'Amelio, *Francesco Saverio Nitti,* Bari, Laterza, 2003.

M. Gallo, *L'Italie de Mussolini,* Paris, Perrin, 1971.（木村裕主訳『ムッソリーニの時代』文藝春秋，1978年）

藤沢道郎『ファシズムの誕生 ― ムッソリーニのローマ進軍 ―』中央公論社，1987年

森田鉄郎編『イタリア史』山川出版社，1976年

（かつた　ゆみ　本学准教授・社会思想）

NII-Electronic Library Service